開会挨拶

上田：司会を務めます立教大学の上田と申します。今回、アジア地域研究所主催という形でシンポジウムを開催させていただきます。シンポジウムとして「貿易陶磁と文献史料から東アジア・東南アジアの歴史を考える」という名称で行いたいと思います。

この企画ですけれども、今、立教大学で進めております「21世紀海域学の創成」というプロジェクトの一環という形になっておりまして、今回のシンポジウムの成果はその報告の中でまとめていきたいと思います。

それでは早速始めたいと思います。趣旨説明を立教大学文学部で史学科教授の弘末にお願います。

弘末：おはようございます。本日のシンポジウムの趣旨を説明させていただきます。

16～17世紀の東アジアと東南アジアの海域世界では、明朝下の経済発展や1567年の海禁政策の緩和により、たくさんの華人が活動します。また、16世紀の後半から終わりになりますと、戦国時代の鉱山開発により豊かな銀や銅を産出した日本人が海外貿易へ参入します。そして、その頃大航海時代を迎えましたヨーロッパ人がアジアへ来航しまして、ポルトガル人、スペイン人、オランダ人、イギリス人などがこの交易網に加わります。東南アジアは、香辛料や森林生産物の取引で東西世界の多数の商人を引きつけました。

こうしたことが要因となって、この時代の環南シナ海と環インド洋世界は、交易活動が活性化しました。この時代の東南アジアや東アジアでは、多様な交易ネットワークが形成されたことが文献史料と残された陶磁器から明らかになります。

中国陶磁をはじめ、日本の肥前陶磁、ベトナムやタイ、ビルマの陶磁器が、この時代広範に取引されました。残されたそういう陶磁器や陶器は、多様な交易網の存在と港市や地域社会の活動を解明するための重要な資料となります。私自身は陶磁器の専門家ではないのですが、せっかく5人のその専門家の先生方がお集まりですので、シンポジウムの趣旨を二本立てさせていただきました。

一つは、陶磁器の残されたものから見えます、多様な交易網を支えた商人たちの役割を解明することでございます。彼らが陶磁器の生産地から積出港にどのようなネットワークを形成し、さらに現在それらが残された場所にいかにして運んだのか。それらは海域を経て他港市、さらにはその周辺港市やその内陸部にまでもたらされているかと思いますが、そういう多彩な交易ネットワークの在り方を検討できる非常にいい機会ではないかと思いました。そうした作業を通して、どこが中核となってそれらの商業ネットワークを形成したのかを検討でき、広い交易網とそれぞれの地域で展開した交易ネットワークを構築したメカニズムを、解明できるのではないかと思われます。

もう一つは、受容された陶磁器が当該の社会でどのように活用されたかを考察することです。陶磁器というのは、これは実用品であるとともに、威信財でございますので、今日も伊川先生が最後にお話しいただけるかと思いますが、政治や文化と非常に密接な関係を持ちます。さらにこの16世紀17世紀頃には諸地域で陶磁器生産が新たに始まり、さらに発展させるケースが見られます。これが意味していることですが、新たな交易センターかつ文化センターの一つとなろうとする試みといえるかと思います。

以上の二点を柱にして、今回のシンポジウムを展開させていただければと思います。いずれにせよ、陶磁器のご専門の方々と、文献史料でこの時代を考察してきた方々のお話を聞かせいただくことで、16世紀の東アジアや東南アジアの交易網と文化社会のダイナミックな形成過程を明らかにするというのが、本日のシンポジウムの趣旨でございます。どうぞよろしくお願いいたします。